

---

# 七人の少女の事情。

M A T S U K I

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

七人の少女の事情。

### 【Nコード】

N4878C

### 【作者名】

MATSUKI

### 【あらすじ】

彼女たちを救ってほしい。手を差し伸べてあげてほしい。あなたの愛で、救ってほしい。気付いてほしい。

## くプロローグく

世の中には

数え切れない程いろいろな種類の人間がいる。

わがままな女。

意地悪な男。

親切な女。

ケチな男。

なまけものな女。

怖がりな男。

性格は様々だ。

少女も様々な事情を抱えている。

今、すれちがったあの子も、  
事情を抱えているのかも知れない。

長袖女・・・・二宮沙季  
しょう油女・・・・長瀬あさみ  
トラウマ女・・・・川田莉子  
オタク女・・・・大石夏帆  
男女・・・・藤川瑞希  
強すぎる女・・・・蒼井さくら

普通だった女・・・・・・・・中田加奈

私が知っているのは、この七人。  
いずれも、人には言えない事情があるらしい。

今日は、この七人のお話をしよう。

しかし、私が話す七人の少女たちだけが、  
事情を抱えているわけではない。

街には、悲しみに暮れた少女、  
道を踏み外しかけている少女が溢れている。

手を差し伸べてあげてほしい。

この小説を読んで、気付いてほしい。

あなたでも、いや、あなたが、  
彼女達を救ってあげられるのだと。

あなたの、愛で彼女たちを  
助ける事ができるのだということ。



私は、気付いてほしい・・・。

## 長袖女。〈PART1〉

季節は、夏。

ミンミンうるさくセミが鳴いている。  
ま、いいんだけどね。  
夏ッぽいし。

僕の名前は、斉藤隆。

高校二年生。

顔も体型も、

運動神経も並で

普通の高校生だと思っただけど・・・

ただ、頭が悪い。

すごく悪い。

この前の期末テスト、

全部赤点だった。

そのまた前の中間テストも、

全部赤点。

夏休み、毎日補習に行ったから、  
何とか留年はまぬがれたけど、  
そろそろ本気で頑張らないと  
やばそうだ。

今日から新学期。

何だかんだ、楽しみだ。

気分が新しくなるってゆーか・・・

靴も新しいヤツにした。

バイト代でかったカツコイイやつだ。

「あれ？斉藤靴変えた？」

学校の靴箱で、クラスメイトの金村が、

気付いてくれた。

「へへ。分かったー？コレ、〇〇の新作でー」

「それよりさー」

「な、なんだよー。もっとくいつけよ」

「悪い。俺、ぶっちゃけお前の靴にそんな興味ない」

「あつそー」

俺はなんとなく不機嫌になった。

「まー、そーふくれんなよ」

「うつせー」

「とっておきのネタがあるんだよ」

「え？！何々！！？」

「今日、転校生が来るんだってー」

「え？！男？女？」

「お・ん・な」

「まじかよー！めっちゃめっちゃテンション上がるじゃねーか」

「まー、俺は興味ねーけど。望がいるし」

「嫌味かよ……。で、かわいいの??」  
「わかんねー。顔は見たことねーからさ」

新学期になると、ときどき転校生がやってくる。  
それが、結構楽しみだ。  
しかし、いつも大体は期待はずれ。  
まあ、そういうスリルを  
楽しむのが醍醐味なのだ。

今回も、そのスリルを楽しむつもりでいた。  
しかし、この転校生のせいで、  
俺はとんでもない事に巻き込まれていく事を、  
この時の俺はまだ知らなかった。

## 長袖女。 ～PART2～

まだみんな夏休み気分が抜けないのか、  
もう担任の先生が来ているのに、  
ガヤガヤ騒いでいる。

「おいおい！いい加減きりかえろ！しずかにしろ！」

先生の罵声。

でもみんな真剣に聞いてない。  
でも、さっきよりは静かになった。

「今日はみんなにお知らせがあるー。今日から、このクラスに新しい仲間が来る事になった。紹介するぞー」

「ふぉ~~~~~~~~ツ!!!!!!!!!!」

同じクラスの馬鹿キャラ、水野が叫ぶ！

「かわいい系女子キボンヌッ」

「やだぁー」

女子が失笑している。

それもそうだ、

いくら楽しみだといつても、

机の上に乗って叫ぶなんて、

やりすぎである。

水野は一体、どこまでテンションがあがってるんだろう。

「コラ、水野、静かにしろ！全くお前は小学生か」

「へへ、すみません」

水野は席についた。

が、今度は周りの奴を標的にした。

「なーなー、どんな奴か知ってるやついる？？」

みんな、顔が困っている。

しょうがない・・・

「女だよ」

俺は答えた。

「まじ?! 斉藤?!」

「まじ」

「かわいいのかな、ソイツ」

「あんま、期待しない方がいいぜー。どーせブサイクだよ」

「まあーな。かわいいのは滅多にこねえもん」

そして、先生が、

「よし、では入ってこい」

と、教室のドアの向こうの  
人影に向かって言った。

ガララッ。

胸の辺りまで伸びた茶髪の長い髪。

透き通るような白い肌。

アイラインがきいたまろく大きい目。

よくとおった高い鼻。

ほんのりピンク色の唇。

手足が長く、まるでモデル。

転校生至上、じゃなく、

俺が生きてきた中で一番かわいい女の子だった。  
ビククリして、目玉が落ちそうだった。



思わず声が漏れた。

「まじかよ・・・」

水野も暴れだした。

「超やべーーーー！！！！めっちゃかわいい！！！！」

「コラ、水野、今から紹介するから、とりあえず座れ！」

女子もビクリしている。

「あんなかわいい子来たら、学年中の男子がウチらに見向きしなくなるじゃん」

もの凄く残念そうだ。

『あれ？』

1つ、気になる事があった。

何で、この真夏の季節に長袖のカーディガンを着ているのだろう？  
薄手だとは思うが、多分ニットだ。

見ているコツチが暑苦しい。

それから、何だか彼女の目が・・・

冷たい。

よく分かんないけど、心がないみたいだった・・・  
これこそ、「お人形のよう」だよ。

先生が、黒板に大きく名前を書く。

『二宮 沙季』

「大阪の学校から転校してきた、二宮沙季さんだ。ほら、自己紹介してごらん」

「え・・・」

彼女は少し嫌そうに、

「二宮です・・・よろしくお願いします」

と、小さくしかも早口で言った。

真ん中らへんの席の俺でもこんなに  
聞き取りにくかったんだから、

一番後ろの奴なんて何にも聞こえなかったはずだ。

「そうだな。席は、斉藤の横に空いてるな」

「えッ・・・俺の横・・・」

水野が手を挙げながら、

「何だよー！！俺の横にしてくれよ！！俺の方がイケメンだしさー！な、サキちゃん」

二宮さんは怪しいオッサンを見るのと同じ目で、  
水野を見ている。

やばいぞ、水野・・・！！！！

「うるさい！水野、おまえは幼稚園児かあ！」

先生の罵声。

水野はいいかげん静かにした。

ぶくーッとほっぺをふくらませているが。

「あ、きにせず水野の横に座ってくれ」

「・・・はい」

彼女が歩いてくる。

俺は、

ゴクリと唾を飲んだ。

そして、席に着いた。

「よ、よろしくな」

俺は、声をかけた。

しかし、彼女はチラッと俺を見て軽く会釈しただけで、何も言わなかった。

そして、それから、ずっと何も言わず、下を向いたままだった。

長袖女。 ～PART3～

うゝん・・・

やっと学校が終わった。

といっても今日はまだ、

授業がないからマシだけど。

明日からは地獄の授業だあー。

でも、何だかウキウキしている。

だって、俺の横には、

謎の転校生。

こんなヒステリアス（正しくはミステリアス）な  
ヤツは初めてだ。

彼女は今、何を考えているのだろう???

「おい、斉藤斉藤ッ」

声をかけてきたのは水野。

「なんだよ」

「お前今日暇？」

「用事はないけど、なんで？」

「ちょっと俺に付き合えよ」

「えゝ、俺そんな趣味じゃねえよ」

「ちげーよ、馬鹿！俺の用事に付き合えって言うてんの」



「やだよ」

帰ろうとする俺を、  
何としても引き止めたいのか、  
俺の服の裾を掴んで離さない。

「話だけでも!!」

「・・・何の用事？」

「俺、あの子、二宮さん。何となく気になってさ。今日尾行しよう  
と思うんだ」

「えー!! ストーカーじゃねーか!! やだよ、一人でやれよ!!」

「悪い話じゃねーだろ?? お前も気になってるくせにー」

「き、気になってねーよ」

「嘘だね」

「嘘じゃねーよ……。多分」

結局、俺は水野につきあう事にした。

「おい、斉藤絶対見つからねーよーに、慎重にな」

「わかってら」

俺達は少しずつ、二宮さんの後をつけていった。

彼女は、一人でスタスタ歩いていく。

そして、彼女とすれちがったどっかの女子高生が、

「こんなクソ暑いときに・・・アイツ頭おかしーんじゃない？何で力ーディガン着てんだろ」

と、笑っていた。

こんなに大きな声では彼女の耳にも入ったはずだ。  
でも、依然彼女はそれを気にとめる様子もなく、  
スタスタ歩いていく。

と、その時。

水野の携帯が鳴った。

「もしもし。あ、セイラちゃん え？部活急に休みになったの？」

・・・嫌な予感がある。

「えゝ、今男友達と遊んで・・・」

水野が、求める目で俺を見ている。

「行けよ」

俺は仕方なく言った。

「あ、友達が行ってやれって！今からすぐ行くよ！」

ピッ。

「へへ、悪いな、水野」

「調子いいやつ」

「尾行の続きはお前一人でやってくれ」

「え？！そんな・・・」

俺が文句を言う暇もなく、  
水野は風のように行ってしまった。

帰ろうかな・・・

でも・・・

知りたいな・・・

結局、俺は一人で尾行を続行していた。

『何で俺が一人でバカなことやってんだ』

その理由は俺自身にも分からない。

五分ほど歩いた頃。

彼女は、一人でアイス屋に入っていた。

『アイス屋???』

気になって、俺も入ろうとしたら・・・

彼女は、自動ドアのすぐ向こうに立っていた。  
俺をじっと見る。

「やべえ！！！！！」

「あなた、私の事ずつとつけてたでしょ」

やばい！！！！！！

長袖女。　　↓PART4↓

俺は、お詫びとしてアイスをおごることにした。  
近くのベンチに、彼女は座って待っていた。  
俺は、少し距離を置いたけれど、同じベンチに座った。

「あの・・・その・・・本当にゴメン!!」

「・・・別にいいわよ、もう」

「あ・・・うん・・・」

「あんた達わかりやすいのよ」

「え・・・???!あの、いつから知ってたの?」



「まだ、学校にいたとき」

「え?!そんな時から?!」

「コシヨコシヨ話になってなかったわよ、あの声の大きさじゃ・・・」

「・・・スイマセン」

「あんたって、そういう趣味なの?」

「ち、違うよ!!!!」

「じゃあ、何で?」

「あ・・・その・・・」

言葉が詰まった。

そんなの、俺自身が分からないから。

水野が帰ったとき、

俺もこっそり帰ればよかったんだ。

「あ……気になったんだ。二宮さんてさ、ちょっと謎めいてて  
っていうか……その転校生だし」

「じゃあ、転校生全員尾行してんの？」

「違う、違うよッ」

「変な人ね」

彼女は、そう言っただけ、  
無言でアイス食べている。  
おれも、つられて必死でなめているが、  
何だか、気まずい。

周りから見ても、多分すごくおかしいと思う。

『何か……話さねーと……』

「アイス・・・うまいなあー」

「うん」

「毎日、来て食べてるの？」

「うん」

「そんなに好きなんだなー」

「・・・暑いからよ」

その時、俺の頭の中にハテナがいつぱい浮かんた。  
だって・・・おかしいじゃん。  
だったら・・・だったらさー。

「暑いんだったら、脱げば？」

「何？」

「カーディガン長袖だから、暑いんじゃない？」

「・・・」

「ねエ、俺なんか気にせず、半袖になりなよ。俺、そーいうの気にしないタイプだし・・・」

「うるさいわね、ほっというてよ！！！！！！」

ベチャッッ。

彼女の持っていたアイスが地面に落ちた。  
地面の暑さで、すぐにアイスは溶け始めた。

彼女は、立ち上がった。

ギュッと握りしめたこぶしに、  
力が入りすぎてプルプル震えている。  
目が、怒っている。

何で、こんなに怒るんだろう？

「・・・悪い・・・」

「・・・」

「・・・あ、二宮さんアイス落としちゃったね。・・・俺、も一個買ってきてあげようか・・・？」

「・・・帰る」

彼女はカバンを持ちあげ、  
帰ろうとした。

「あ、待ってよ、二宮さん！」

「軽々しく私の名前を呼ばないで！」

「え・・・」

「友達じゃあるまいし」

「そんなかたいこと言うなよ、クラスメイトじゃねーか」

「くだらない」

そう言つて、彼女は歩いていった。  
でも、途中で振り返り、

「次、私の後を追つたら警察呼ぶから」

と、言つた。

それから、小走りで行つてしまった。

俺は、日が暮れはじめた帰り道を、  
一人とぼとぼ歩いていた。

いつもこの道は一人で通るけど、  
何だか今日はいつもより寂しかった。

聞こえてくるのは、  
ヒグラシの鳴き声だけ。

そして・・・

「はぁあ・・・」

俺のため息だけ。

俺、何か悪い事いつたのか？  
逆に、彼女に気を使ったつもりだったのだが・・・。

俺の後悔は、どこに向けていいものか、  
とてもじゃないが分からなかった。

長袖女。〈PART5〉

「ただいまー」

俺はやつと家に着いた。  
何か帰り道が長く感じた。

「母さん、友紀ー・・・」

返事がない。

『誰もいないのか？』



そんなはずはない。

お父さんは仕事だけど、

お母さんは、最近足を痛めたので、

仕事は休暇をとり、

あまり外に出歩かなくなった。

リビングに入る。

??????????

「母さん、クーラーつけっぱなしじゃないか」

そういえば、電気もつきっぱなしだった。

神経質な母さんだから、

消し忘れるだなんて、

よっぽど急いでたんだな・・・

俺は、机の上に紙が置いてあるのを発見した。

『隆。真理亜のアトピーがひどくなり、呼吸が苦しそうです。今から、救急車を呼びます』

殴り書きでそう書いてあった。

俺はすぐに家のタウンページをめくった。  
救急車は、一番近い病院に運ぶはずだ・・・  
ええと・・・

「岩井総合病院・・・」

俺は、財布だけ持った。  
タクシーで行くつもりだ。

『真理亜、待ってる。お兄ちゃんもすぐ行くからな!』

家を飛び出し、しばらく道路の近くで、  
待っていると、タクシーが通りかかった。  
空車だ。

「すみません!!!!!!!!!!」

俺は、そう大きく叫び、タクシーを止めた。

「どちらまで?」

年のいった運転手さんに聞かれる。

「岩井総合病院まで、お願いします」

「はい」

「どれだけ高速にのつてもかまわないので、できるだけ早くお願いします」

俺の妹、真理亜は今、7歳だ。

そして、真理亜は、赤ちゃんのときから、アトピーという皮膚炎をわずらっていた。

赤ちゃんのときから、手足、首などに、発疹ができ、かゆすぎてよく泣いていた。

ひどくなりすぎた時期もあり、

今日のように、病院へ運ばれる事もしばしばあった。

大げさかと思うかも知れないが、

真理亜の場合、何故か息苦しさも訴える。

幼稚園にあがる頃にも、症状はよくならず、

皮膚が赤いせいでよくクラスのヤツにいじめられ、

泣いて帰ってきた事もいっぱいあった。

もう、その頃には中学生ぐらいだった俺は、真理亜がどれだけ辛いかわかっていた。

でも、馬鹿で知識のない俺には、

泣いている真理亜を慰めてやる事しかできなかった。

真理亜は、小学生になり、

「かゆくても、あんまりかいちゃいけない」

と、自分で思うようになったからか、

アトピーが大分マシになった。

俺達家族も、前よりは真理亜に気をつかわずにすんだ。

実際、この一年ぐらいは、

病院に運ばれる事なんてなかった。

『なのに、なんで、今更・・・』

病院に着いた。

ダッシュで病院の中に入る。  
自動ドアを思い切り走りぬけ、  
近くにあった病院内の地図をみる。

「皮膚科、皮膚科・・・」

皮膚科病棟に入ると、  
暗い顔で、待合室に座るお母さんを見つけた。

「……………母さん」

「……………隆……………。よかった、置き書き見てくれたのね」

「……………うん。真理亜は？」

「今、そこで診察中だから……………入らないでって……………」

お母さんは泣いていた。

「……………泣くなよ、母さん。死にやしないよ」

「真理亜が、学校から帰ってきて……………真理亜があんまり元気だから、全然アトピーが急にひどくなってる事に気付かなくて……………」

「それで……………?」

「真理亜、しばらくいつもの様にお絵かきして遊んだのよ・・・。  
で、お母さん、すっかり寝てしまったの・・・。」

「・・・うん」

「起きたら、真理亜が横たわって・・・最初は寝てるのかと思っ  
ただけど・・・よく見たらぐったりしてて・・・苦しそうで・・・  
・どうして、お母さん寝ちゃったんだろう・・・!!」

「母さん、母さんのせいじゃないよ。大丈夫、真理亜は強いやつだ  
から」

俺は、責任を感じて泣きじゃくるお母さんを、  
必死になだめた。

すると、診察室から、医者が出てきた。

「終わりましたよ」



「先生ッ！うちの娘は?!」

「大丈夫です。命に別状はありませんし、今は目を覚ましています」

「よかった・・・」

「でも、念のため、今日と明日は入院させましょう」

「はい・・・」

「でも・・・どうしちゃったんですかねえ？真理亜ちゃんのかかりつけのお医者様からカルテをお送りいただいたのですが・・・ここ一年ぐらい、大分症状が軽くなってたんですよ？」

「はい・・・私も不思議で、しょうがなくて・・・最近、夏なのに発疹が大分めだたなくなってる。本人もかゆくないかゆくないって・・・」

「うーん・・・急にここまで悪くなるなんて・・・急激なストレスでもあって、ムシヤクシヤしてかいたのではないのでしょうか？」

「急激なストレス・・・？」

お母さんと俺は顔を見合わせた。

少なくとも、俺は、そんな様子は見ていない。  
俺は首を横にふった。

「あの、心当たりはないんですが・・・」

「うーむ、そうですね・・・」

その時、  
小さな子供を連れ、  
一人の女性が息をきらして診察室にはいつてきた。

「お母様、申し訳ありません！！！！！！」

彼女は深く頭を下げた。

一体、なんなんだ？！

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4878c/>

---

七人の少女の事情。

2010年10月8日22時56分発行